

序

皆さんは、身体診察を学び始めるとき、どんな気持ちでおられたでしょうか。聴診器や打鍵槌を手にして、使い方をマスターしようと胸をときめかせた人も少なくないでしょう。先輩医師の優れた技能を何とか習得しようと頑張った人もおられると思います。しかし、最近は画像検査や生理学的検査などと比べて当てにならないといわれることも増えてきました。では、実際には役に立つのでしょうか。

私は、アフガニスタンやラオスでの医学教育支援プロジェクトに関わっていますが、このような途上国では、身体診察が診断において重要な役割を果たします。頭蓋内病変を疑うような神経所見があっても、頭部CTを撮るのは、所見によって治療の方向性が変わる可能性があり、しかも患者さんに十分な経済力がある場合だけです。そういった中にいると、自分の身体診察に自信が持てるかどうかは非常に大きな意味を持ちます。

日本国内でも、地域医療現場では同様です。発熱した高齢患者さんが、入院適応を決めるために病院受診することは難しいです。受診すれば家族も入院させたいでしょうし、入院したら気管挿管や蘇生の可能性、せん妄で転倒や転落のリスクもあります。訪問診療し、病歴と診察で肺炎の診断をつけ、バイタルサインによって敗血症の可能性を考えることができれば、より迅速に適切なケアができる可能性があります。

本書は、このように様々な臨床現場、様々な状況において、どのような身体診察を身につけておくべきか、どうやって学ばばよいかについて、レジデントノートに連載した「問題解決型！身体診察のコツ」を中心にまとめたものです。身体診察を重視する「ジェネラリストのこれからを考える会」の若手が、理想論だけでなく、現実の様子を踏まえ、専門家との見解の違いも含めて著してみました。

この本を手にとっていただいた皆さんが、今まで以上に「身体診察」が好きになり、技能を高めていただけることを願っております。

2010年4月 春風暖かい日に

大西弘高